第5節

手の少陰心経

1　心臓の病候弁証

手の少陰心経は「心中に起こり，出て心系に属す」〔『霊枢』経脈篇〕。そのため，手の少陰心経の経気変動は心に影響を及ぼす。これにより，心臓のさまざまな病症が現れる。

1．心痛

1）虚証

【証候分析】手の少陰心経の血が虚すと，胸悶*・心痛等の症状が現れる。『類証治裁』巻之六・胸痺論治には「胸痺*なるは胸中の陽　微にして運らず，久しければ則ち陰　陽位に乗じて痺*結を為すなり。其の症　胸満ち喘息し，短気し利せず[1]，痛み心背に引く」とある。胸痹*とは，現在でいうところの狭心症である。胸中の陽気が不足して，心

臓の気血が充足されなくなると，心が濡養されず，いわゆる虚による痛みが現れる。本証の特徴的な症状には，心胸部に反復して起こる発作性の鈍い痛み・胸悶*・息切れ・動作に伴う症状の悪化・舌苔白・脈数などがある。

【治法】補脾益気・養血止痛

手の少陰心経・手の厥陰心包経・足の太陰脾経・手の太陰肺経の腧穴を主として取る。鍼を用いて補法を施す。

【選穴】内関・公孫・膻中・巨闕・陰郄・気海・足三里

【選穴解説】内関・公孫は八脈交会穴であり，心胸病を主治症としているため，心痛を治療することができる。膻中は心包の募穴および気会穴であり，調心気止痛の作用がある。巨闕は心の募穴であり，理気寧心の作用がある。陰郄は，心経の郄穴であり，巨闕と併用することで補益心気・通絡止痛をはかることができる。気海には先天の原気を補う作用，足三里には後天の気を補う作用があり，この２穴を併用することで，補気益血をはかる。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として補益心気・寧心止痛の効果を得る。

2）実証

【証候分析】手の少陰経の鬱滞により，気血が通じなくなって，心に通じる脈絡が滞り，心脈の血瘀が形成されると，胸中痛・心痛を引き起こす。その痛みは強烈であることが多い。例えば，『素問』蔵気法時論には「心病なる者は，胸中痛み，脇支（きょうし）*　満ち，脇下　痛み……」とある。〔これに対する注釈として〕『重広補注黄帝内経素問』には「心少陰の脈の支別なる者は，胸を循（めぐ）り脇に出ずる……また心　少陰の脈の直行する者は復（ふたた）び心系従（よ）り却（しりぞ）きて肺に上り[2)]……」とある。つまり，心経の循行部位上で血行が瘀滞したために，不通則痛となって痛みが

現れるのである。血瘀気滞の心痛は，発作性で痛みが強く，痛みの部位は固定しており，夜間に痛みが増強するという特徴を有する。また，顔色が薄暗いなどの瘀血症状を伴う。

【治法】活血化瘀・通絡止痛

手の厥陰心包経・手の少陰心経の腧穴を主として取る。鍼を用いて瀉法を施す。

【選穴】陰郄・郄門・大陵・心兪・巨闕・膈兪・膻中

【選穴解説】陰郄・郄門は，それぞれ手の少陰経と手の厥陰経の郄穴であり，急性病症を治療する際の要穴として用いられ，緩急止痛をはかることができる。大陵は手の厥陰経の原穴であり，寧心安神・和営血・通経絡の作用がある。心兪・巨闕の兪募配穴により，調心気化瘀血をはかる。膈兪は血会穴，膻中は気会穴であり，この２穴の併用により，行気活血・祛瘀通絡をはかる。

痰湿阻滞〔阻まれて滞ること〕により心前区〔前胸部における心臓投影部〕に痛みが現れている場合には，通陽化濁・豁痰開結をはかる必要があるため，太淵・豊隆・合谷・陰陵泉を加える。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として活血化瘀・通経活絡・豁痰開瘀止痛の効果が得られる。

３）寒証

【証候分析】寒気が心を犯した場合，あるいは寒厥*の気が上逆した場合，心痛を引き起こす。『霊枢』厥病篇には「真心痛，手足清えて[3]節に至り，心痛甚だしきは，旦〔朝〕に発すれば夕に死し，夕に発すれば旦に死す」とある。大寒の気が厥逆*して心を犯し，寒凝気滞・心脈瘀阻*となると，心が養われなくなる。これにより，激しい心痛・手足の冷えといった症状が突然現れる。この際，もし救急措置が間に合わないと，１日以内に死亡に至ることが多い。

急性の心臓の痛みは，手や上肢に沿って喉まで響く場合がある。例えば，『素問』厥論には「手の心主，少陰の厥逆*は，心　痛みて喉に引き……」とある。本証の特徴的な症状には，胸が締め付けられるような痛み・寒冷時に発作が起こりやすい・身体や手足の冷え・甚だしい場合には喘息して横になることができないなどがある。

【治法】温散寒邪・通宣開痺

手の少陰心経・任脈の腧穴を主として取る。温鍼法*あるいは灸を施す。

【選穴】極泉・心兪・厥陰兪・内関・通里・気海・関元

【選穴解説】極泉には，寛胸理気・通経活絡止痛の作用がある。心兪・厥陰兪には，心気を通じ陽気を助ける作用および散寒止痛の作用がある。内関・通里は，それぞれ心包経と心経の絡穴であり，活血化瘀・通絡止痛の作用がある。気海は元気の海[4]であり，関元は培元固本および下焦の元気を温補する作用がある。この２穴に，刺鍼した後に施灸することで，元気を助け，温散寒邪をはかることで痛みを止める。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として温散寒邪・通経絡止疼痛の効果が得られる。

４）熱証

【証候分析】手の少陰経の鬱滞により生じた熱が心を擾すと，心痛が起こる。『霊枢』経脈篇には「心　手の少陰の脈は……是れ動けば〔変動すれば〕則ち嗌〔咽喉部〕[5]乾き，心痛し，渇きて飲まんと欲するを病む」とある。〔これに対する注釈として〕『太素』巻八　経脈之一〔・経脈連環〕には「心経　心を病みて熱多く，故に渇きて飲まんと欲す」とある。また，心経に鬱熱が生じると，卒心痛*が現れる。例えば，『素問』刺熱論には「心の熱病なる者は，先ず楽しまず，数日にして乃ち熱す。熱争えば則ち卒かに心痛み，煩悶[6]してよく嘔し，頭痛みて

面赤く，汗することなし……手の少陰，太陽に刺す[7)]」とある。邪熱が心を侵し，邪正相争となると，熱によって心脈に瘀滞が生じ，突然の心痛が引き起こされるのである。

【治法】清熱通脈・活血止痛

手の少陰心経・手の厥陰心包経・手の陽明大腸経の腧穴を主として取る。鍼を用いて瀉法を施す。

【選穴】少府・中衝・内関・陰郄・合谷

【選穴解説】少府・中衝には，清心瀉熱・理気活絡止痛の作用がある。内関には，益気安神・寛胸理気・通絡止痛の作用がある。陰郄には，清虚熱・安神止痛の作用がある。合谷には，通経活絡・清熱鎮痛の作用がある。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として清熱瀉火・通経活血・理気止痛の効果が得られる。

2．神志病

心は神を蔵する。心の経脈に変動があると，さまざまな神志[8)]病を引き起こす。例えば，癲狂*・心煩・驚きやすく怖がりやすい・よく悲しむなどである。

1）癲狂

情志*が傷付き，神明が錯乱すると，理性的な思考や行動ができなくなる。癲狂*病は一般には陰証と陽証に分けられ，癲病*の多くは陰に属し，狂病*の多くは陽に属する。『難経』〔二十難〕には「陽を重ぬる者は狂，陰を重ぬる者は癲[9)]」とある。

①陰証

【証候分析】本証は，心気不足により，神気が虚すことで，理性や知性が失調し，自らをコントロールできなくなることにより起こる。例えば，『霊枢』癲狂篇には「狂者の多く食らい，善く鬼神を見，善く笑いて外に発せざる者は，これを大いに喜ぶ所あるに得たり」とある。〔これに対する注釈として〕『霊枢集注』〔巻三・第二十二〕には「此の喜びは心志を傷りて虚狂を為すなり。心気虚し，故に欲して多食す。神気虚し，故に善く鬼神を見るなり。之の大喜を得るに因り，故に善く笑い外に発せざる者とは，冷笑して声無きことなり」とある。また，『霊枢』癲狂篇には「狂始めて生ずるや，先ず自ら悲しむなり。喜みて忘れ，苦だ怒り，善く恐るる者は，これを憂飢に得たり[10)]」とある。心気不足・神気虚弱となると，まず悲しみ，憂い，心煩し，続いて幻覚や恐怖感といった症状が現れるのである。

【治法】益気安神・解鬱開竅

手の少陰心経・足の太陰脾経・足の厥陰肝経の腧穴を主として取る。鍼を用いて補法を施す。

【選穴】神門・心兪・脾兪・豊隆・太衝・肝兪

【選穴解説】心兪・神門には，開竅醒神の作用がある。肝兪・太衝には，疏肝解鬱の作用がある。豊隆には，健脾和胃化痰の作用があるため，祛痰をはかる際の要穴として用いられ，豊隆と脾兪を併用することで，理気祛痰開竅の作用を強めることができる。

腎虚の場合は太渓を加え，気虚の場合は足三里を加える。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として健脾益気・安神定志・開竅醒神の効果が得られる。

②陽証

【証候分析】心経に生じた実熱が盛んになり，これによって上方にある神明が擾（みだ）され，内にある神が正常な状態を保てなくなると，思考や行動が失調して狂病*を発症する。例えば，『霊枢』熱病篇には「熱病数（しばしば）驚き，癔癡（けいしょう）*して狂するは，これを脈に取る。第四鍼〔鋒鍼〕を以て，急ぎ有余なる者を瀉す。癲疾（てんしつ）*　毛髪去るは，血を心に索（もと）め，これを水に索（もと）むるを得ず。水なる者は腎なり」とある。つまり，邪熱が心に入ると，心の症状として発熱・痙攣・精神錯乱・心煩して落ち着かないといった症状が起こる。これに対しては，鋒鍼を用いて刺絡法を行う。ただし，陽が極度に盛んで陰が極度に虚し，毛髪が抜け落ちるような場合には，腎経の腧穴は使うべきではない。これは，腎水が心火を抑制することで，心陰虚による虚火がさらに旺盛になってしまうからである。『脈経』巻六・心手少陰経病証には「心病，其の色〔顔色〕赤く，心痛み短気し，手掌煩熱し，或いは啼き笑い罵詈（ばり）し，悲しみ思い愁（うれ）い慮（おもんぱか）り，面赤く身熱し，其の脈実大にして数。此れを治すべしと為す。春は当（まさ）に中衝を刺し，夏は勞宮を刺し[11]，季夏[12]は大陵を刺し，皆これを補う。秋は間使を刺し，冬は曲沢を刺し，皆これを瀉す」とある。これは，心包経の五輸穴を用いた治療である。

【治法】醒神開竅・瀉肝清火・豁痰寧心

手の少陰経・手の厥陰経・督脈・手足の陽明経の腧穴を主として取る。鍼を用いて瀉法を施す。

【選穴】水溝・大椎・少府・霊道・労宮・中衝・太衝・豊隆

【選穴解説】水溝・大椎は，督脈の経穴であり，督脈は脳と連絡しているため，この２穴を用いて清泄陽邪・醒脳開竅・安神定志をはかることができる。中衝・労宮は，それぞれ手の厥陰経の井穴と滎穴であり，醒神開竅・清心瀉熱安神をはかることができる。太衝には，瀉肝清熱の作用がある。少府・霊道には，清心安神・通経活絡の作用がある。

豊隆は，治痰をはかる際の要穴であり，豁痰開竅の作用がある。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として清心瀉熱・鎮静安神・醒心開竅の効果が得られる。

もし，狂ったように走り回る症状がある場合には曲池・足三里を加え，幻視・幻聴がある場合には睛明・聴宮を加える。

２）痴呆

【証候分析】痴呆の症状としては，知能の低下・記憶力の低下・感情表現の異常などがみられる。これらの多くは，心虚神弱あるいは心熱痰鬱によって起こる。例えば，『霊枢』本神篇には「心は脈を蔵し，脈には神を舎(やど)す。心気虚すれば則ち悲しみ，実すれば則ち笑いて休(や)まず」とある。心気が虚すと神が怯え，悲しみやすくなり，心経の実熱によって内にある神が正常な状態を保てなくなると，笑い出すと止まらないという症状が現れる。また，心気が逆乱(ぎゃくらん)*すると，神志(しんし)が失調し，心煩，煩躁不安，あるいは寡黙になり話したがらない，うなだれ無気力となり動きたがらないといった症状が現れる。『霊枢』五乱には「気心に乱るれば，則ち煩心密嘿(みつもく)[13]し，首(しゅ)〔頭部〕[14]を俛(ふ)して静かに伏す」とある。また，『玉龍歌』には「痴呆の症は親しむに堪えず，尊卑を識(し)らず枉(ま)げて人を罵る。神門は独り痴呆病を治す。手を転(まわ)し骨開きて得らるる穴　真(まこと)なり」とある。つまり，心経の原穴である神門は，寧心安神をはかることができ，痴呆・驚悸(きょうき)*・笑い出すと止まらないといった神志(しんし)病を治すことができる。

【治法】益腎寧心・活血散瘀・醒神開竅

手の少陰心経・督脈・足の少陰腎経・足の太陽膀胱経の腧穴を主として取る。鍼を用いて補法を施す。

【選穴】神門・少商・百会・風府・湧泉・心兪・膈兪・豊隆

【選穴解説】百会・風府は，督脈の経穴で，督脈は上行して脳に通じて

おり，百会・風府の２穴に刺鍼することにより，昇陽益気・醒神蘇厥・寧心定志をはかることができる。神門は心経の原穴であり，益心気寧心志の作用がある。少商は手の太陰経の井穴であり，醒神開竅をはかることができる。湧泉は腎経の井穴であり，回陽救逆・蘇厥開竅をはかることができる。膈兪は血会穴であり，活血益気の作用がある。心兪は心の背部兪穴であり，益心寧神の作用がある。豊隆には，健脾化痰・和胃降逆の作用がある。

これら諸穴の組み合わせにより，全体として益腎寧心・活血散瘀・醒神開竅の効果が得られる。

３．血症

心は血脈を主り，血は臓腑・身体・皮毛を濡養している。邪気によって心が犯され，気血の運行が乱れ，血が脈外に逸脱すると，さまざまな出血症状が現れる。例えば，唾血・吐血・下血・鼻出血などである。このような場合には，心経の腧穴を用いて治療することができる。

１）虚証

【証候分析】心気が不足して血脈を主る機能が低下し，血を統率できなくなって血が脈外に逸脱すると，皮下出血とそれに伴う肌膚の痛みが現れる。例えば，『霊枢』邪気蔵府病形篇には「心脈……微渋なるを血溢，維厥[15]……と為す」とある。つまり，血虚により血行が滞り渋ると，血が脈外に溢れ，皮下出血が現れる。加えて，四肢の厥逆*による冷えや冷痛などが現れる。『鍼灸大成』巻六・手少陰経穴主治[16]には「通里……婦人の経血過多，崩中*を主る」とある。通里は心経の絡穴であり，心血不足・気虚不固に伴う経血量の過多を治療することができる。